

## 我が国の子ども達の学力について



木村 孟

文部科学省顧問、東京都教育委員長  
元東京工業大学長

平成8年に世に問われた第15期の中央教育審議会の答申「21世紀を展望した教育のあり方」は、「ゆとりの中で生きる力を育む」を基本的考え方とする高邁な理想に基づくものであった。この答申に基づいて、平成10年に学習指導要領が改正され、一部前倒し実施が行われた。平成13年に行われた全国教育課程状況実施調査で、平成6-9年調査に比し、社会、算数・数学で非常に成績が下がったこと、2003年に実施されたOECDによるPISA調査の結果、読解力が2000年の7位から14位に下がったこと等により、平成8年の答申は「ゆるみ教育」を提唱したとして、マスコミを始め、各方面から厳しい批判を浴びた。新学習指導要領がほぼ完全実施された平成15年に行われた、全国教育課程状況実施調査において、子ども達の成績は6-9年レベルにまでV字回復した。それ以上の成績となった教科も幾つかあった。それにも拘らず、批判の嵐が収まらなかったのは、平成8年の答申が、高い理想を追い求めすぎ、数々の新しい試みを教員に押し付ける形となり、大部分の教員が答申の要求について行けなかったこと、授業時数を減らしたことが、学校で教えれば教えるだけ子ども達の学力は高くなるはずだ、と言う我が国の伝統的考え方を共有する多くの国民の反発を買ったことが主な原因であると考えられる。

PISA調査は、子ども達の読解力、数学的リテラシー並びに科学的リテラシーを計るもので、将来の人生で直面するであろう課題に立ち向う準備が出来るか、物事を論理的に考え、分析し、判断し、自分の考えをきちんと他人に伝えることが出来るか等、生活をしていくために必要な力を試すものである。これに対して、IEA（国際教育到達度評価学会）が行っている、算数・数学、理科の国際比較テストは、学校で学習した内容がどの程度身についているかを調べている。後者のテストでは、最近少し下がったとは言え、日本の子ども達はかなり良い成績を挙げている。PISA調査も、読解力以外は、若干成績は下がっているが、依然として、世界の上位に位置している。日本人は、殊の外ランキングが好きであり、ほんの少しの成績の上下に一喜一憂する。初中教育において最近特に注目されているフィンランドが、GDP比3.7%の公財政支出を行っているのに対し、我が国は2.6%である。それにしても、善戦していると見るべきであろう。

筆者は、国際比較テストにおける成績はさほどは気にし

ていない。心配しているのは、我が国の子ども達の勉強意欲の低さである。先に紹介したIEAでは、学力調査の度に、子ども達にアンケート調査を行っている。2003年の調査では、数学、理科について「勉強が楽しい」と答えた我が国の中学生は、それぞれ39%、59%であった。国際平均が65%、57%であるから、理科はまあまあとして、数学については状況はかなり深刻である。両教科について「得意な学科である」と答えた中学生は、それぞれ39%、49%で国際平均が54%、54%であるから、かなり低い。いずれにしても、10数年前から懸念されている、我が国の子ども達の「理数離れ」の傾向が確かに見て取れる。この傾向は、エンジニアリングを生業とする我々だけではなく、科学技術に頼らざるを得ない我が国にとっても大問題である。

子ども達の「理数離れ」の原因については、様々なものが考えられるが、の中で筆者が、最も重要視しているのは、日本人の大人の科学技術に対する関心の希薄さである。OECDが加盟国中の14ヶ国について、国民の科学技術に対する興味・関心の度合いを調査した結果が、1997年に発表されている\*。これによると、我が国の成人が有している科学技術の知識の量（scientific literacy）は14ヶ国中13位、科学技術に対する関心は最低の14位、科学技術に対する積極性も14位と惨憺たる結果である。これでは、理科好きの子ども達が育つはずがない。筆者はかねがね欧米先進諸国の国民に比し、日本人の大人は、知的好奇心が低いのではないかという見方をしているが、OECDのこの調査結果にそのことが如実に現れている。ゴールデンアワーにTV各局が、極めて低俗な番組を流し、国民の多くがそれを喜んで見ている国は、他には見当たらない。極めて象徴的である。残念ながら、このような状況を、短期間に改善する方策はない。

比較的短期間に効果が出るのではないかと筆者が考えているのが、フィンランド方式である。フィンランドも、日本と同じく中学校では教員は教科担任となるが、全て専門の学科の卒業生であり、しかも修士課程を修了していなければならない。物理の教員は、物理学科の学部、修士課程で、将来、大学で研究者になろうとする者と全く同じ学問をする。

要するに、家庭で子どもに接する親、学校で子ども達を教える教員の知的レベル(literacy)を増さない限り、算数・数学好き、理科好き、さらには勉強好きの子ども達は増えないということである

\*SCIENCE AND TECHNOLOGY IN THE PUBLIC EYE ; OECD 1997